

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	うぐいす : 文苑
Author(s)	槇雨
Citation	龍南會雜誌, 98: 28-34
Issue date	1903-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5516">http://hdl.handle.net/2298/5516</a>
Right	

## うぐひす

檣 雨

和らかな春の朝風が、さら／＼と笹の葉鳴らす音に、ふと目覺めた一羽の鶯は、驚いた様に四邊を見回した。昨夕、彼は飛び疲れ、歌ひくたひれて、何處とも分かれぬ此竹藪に、小やか夢を結んだのであつた。

文

「何時のまに夜が明けたか少しも知らなかつた。……今日も亦好い天氣だ」

實に美しい春の朝よ、野といはず山と云はず、あらゆる世界に棚引渡つた八重霞の紫色の幕、その幕を通して、今しも東の山端を離れやうとしてゐる太陽は、のどかな、而も明らかな光を投げる、其色の深紅は、霞の紫に混じて、何とも譬へやうのない、美はしい色に世界のあらゆるものを彩つてゐる。

鶯はうよ吹く朝風に、胸の和毛を撫でさせながら、まばゆき日光に目をしばたせて、うつとりとして四邊を眺めてゐる。——公平な日光は、彼のさ／＼やかな眼にも、全しく平等に光を注ぐので……

宛

東天紅、東天紅、

あなただの人里、ほの／＼と炊烟の舞上るあたりから、規則正しい雞は、晨をつげて、里人に今日の務を取かれよと、命するのである。

静かな朝景色に見とれてゐた鶯も、今鳴いた鶏の聲に、ふと我に歸つて、聲朗らかに鳴き出した、  
法法華經、法法華經、

一聲又一聲、朝の寂寥を破つて、聲は遠く霞を傳つて響いてゆく、彼方の里に罪なき幼兒のあどけ

ない夢をさますであらうか、乃至は、囹圄の人を唯一の眠てふ慰安より呼起して、悲しい苦しい勞働てふ現實に導くであらうか。

歌は已んだ、彼は今飄々として飛び出した。小さき翼をあやつりながら、

温かい春の氣に、彼はさながら、其心も跳るかのやう、緑の麥生、黄金色の菜畑、炊烟立のぼる茅屋、水車めぐる小川の上をかすめて、あちらこちらと飛びめぐる。空には早、雲雀の歌も聞ゆる。野には農夫も立つた。その執る鎌の、朝日にかゝやくのも見える。彼は美しい景色に浮かれて居たが、かよわい彼の翼はやがて疲れたので、休まうと四邊を見回すと、すぐ側の岡の上の小地の岸に一本の青柳がやさしげに枝をたれてをる。彼は其處に翼を休めた。

喘ぎ／＼彼は、四方を眺める。――さながら、揃へた様な、同じ大さの小松、菫、蓮花草、蒲公英などに飾られた芝生、さゝ波さへも立たず、實に鏡とも見ゆる池の面、其面にうつれる一本の緑の色浅き糸柳、其枝に宿つてをる一羽の小鳥、――あはれな薄墨色の羽色の――と遞次に眺めた。彼は此哀れな小鳥の姿を輕蔑した。そして好奇の心を以て何處にその實物がをるかと思ひ返した。然し不思議！。此池のはとりには、柳は自分が宿てをるのより外にはないのだ、そしてその柳には自分より外には何も宿つては居らないのだ。して見れば、此あはれむべき小鳥の姿は即ち自分であらうか。彼は其目を疑はざるをわなかつた。而も實在は遂に實在だ。彼は今初めて、其身の姿の醜いのを知つたのである。

「つまらぬ／＼、これがまあ、私の本當の姿だらうか、ほんとに情ないことね。こんな姿と知らないで、よくまあ、すう／＼しく今迄方々飛び廻つて、面白くもない歌なんぞ唄つてゐたんだらう？。

こんな事なら、もう山から出て來なかつた筈なのに、あの、賤しいと思つてゐた雀よりも私の方が餘程情けないのだもの、」

彼は、今迄の愉快は何時の間にか、悲哀と變じて、小さな胸には、不平と怨恨とが満ちみちて、眼には最早涙も宿つてをる。

「聲が少しは能いなど、自惚して、飛んでもない耻さらしに、態々よく此處迄も出て來たものだ。うれにつけても、あの鳩や、翡翠などがうらやましいわ。」

自分の欠陥を知るものは、やかても他を羨まんとするものである。彼は頻りに其身の醜きを慨ち、且悲しんでをる。今からすぐに奥深き山の古巢に立歸らうか。併し態々野に出る爲に、親に教へられ、又自からも骨折つて習つた春の歌を、未だ碌に謠ひもしないのに、どうして歸られよう。此歌は春の神が廣く下界を支配してをられる間は、絶えず謠はねばならない筈のものであるのに、……と兎や角と考へて居ると

ガタリガタリ、と程遠からぬ所に、すさましい音。彼の妄想は破られた。彼は喫驚びつくりして飛びあがつた。今しも一輛の荷馬車が、岡の麓の石多き坂道を走るのであつた。

「何だ、つまらない、喫驚びつくりしたわ、」

彼は漸く胸をなでた。而も尙其飛行を續ける。

法、法華經、……

朗らかな、而も憂を帯びた唄聲。其聲は、とある別荘らしい軒端から聞えた。彼は我にもあらず飛に飛んで、いつしかと來たのだ。彼は耳を傾けた

再び唄の聲、

法、法華經、

「わや聞いたような聲だよ、……あの語呂の鹽梅、節廻しのいゝ所、……わ隣りの三ちゃんぢやなくつて……」

彼はかく心に思つた、しばらく翼を、庭の面の苔蒸したる石燈籠の上に休めて、木立の間から窺て見ると、疑もなく哀れな三ちゃんは、小さき籠の中に閉ぢこめられて居るのだ。朱塗の籠、それを飾れる紫の房、何の役に立つか、此等は雨にいふせき朽葉の床にも劣るのである。玻璃壺中の水、錦手の碗に盛つた擦餅<sup>すりもち</sup>。何の美味<sup>うま</sup>からう、此等は堅き笹の芽、穢き小虫にも如かないのである。彼の親しかつた友の三ちゃんは、今將に一尺四方の籠中を天地として。庭の景色に世の春を悟つて、只獨り冷い床に、はかない夢を結ぶ憐むべきものとなつてをるのである。

彼は其身の今迄の悲哀も皆忘れてしまつて、近く進み寄つた。

「三ちゃん」

あまりのはかなさに聲も碌々出ない、

「三ちゃん、三ちゃん、私ですよ、」

三ちゃん呼はれた鶯は、不思議さうに見廻したが、やがても、彼を見付つけて。

「わゝ、芳さんか、よくまあ」

他に言葉はない、

兩者眼はうるんでをる、

三ちゃんはまだ言葉續けて、

「芳さん、羨しいのね。私なんざこやつて、こんな狭い所に入れられて、食物も寢所も皆與へられるまゝ、聲自慢の昔もあつたが、それが何にならう、せめて氣をまぎらかさうと唄はやつてはをるけれど、慰どころか、少しも氣は浮立たない、どうくかうして死んでしまふのだらう！」

聲は慄うてをる、芳ちゃんは聞くに堪へない、悪かつた、先程は、池の邊に我姿の醜いのを見てつく／＼此相をはかなんだが、思へは大きな間違であつた、仲間の内でも第一の歌ひ手であつた此三ちゃん、其歌のよい爲に、どうく捕へられて此苦をするのだ、もし我等があつた鳩か翡翠のやうな羽を持つてをつたならば、意地悪い人間はどうするだらう。定めて我等の残らずを、あの恐ろしい牢屋の中に入れて、弄ばうとするだらう。思ふばかりで慄とするやうだと心に考へた、彼は思はず身を震はした。

かう思ふにつけても、我友のいたましい姿が、眼前にあるのが如何にも哀れで堪らない。何とか慰めやうと思つてをると、三ちゃんは又口を開いた。

「ねー芳さん、僕等がよい聲を持つてをると言つて、別に人間に聞かせる爲のでも何でもないので、僕等は天から授つた、其儘を、自分の氣に入つた時に謠うので少しも所も何も選ばないのさね、別に人が居つても居らなくつても、そんな事は關はないのさね。丁度雪が海の上にも、陸の上にも、全じやうに降つて、積らぬ所など分け隔てをしないのと、全じことさ、それを人間が自分の所に僕等を捕へて、ろうして歌を聞かうとする。こんな不條理なことはありやしない。

彼の聲は憤に震へて聞ゆる。彼は尙ほ言葉を續ける。芳さんは耳を傾けて聽いてをる。

「だが芳さん、僕はもう、之であきらめてをるのよ、世の中には、朝から晩まで、鞭うたれて使はれて、夫で苦しいとも言へない馬のようなものもあるのだ。それから見ると、僕などは幾分かよい内だろうよ。之も皆神様のなさることと思へば、何でもあきらめもつく譯さ。

殊勝な三ちやんの言葉に、耳傾けてゐた芳さんは、大に悟る所があつたかのやう、何とか言ひ出さうとした時、椽側の障子さらりと開いて、あらはれたのは、二人の腕白小僧、

「兄さん、あすこにも驚がゐますよ、」

「静にしな、今糺竿もろざなを取つてくるから。」

大きいのは奥に走り入つた、

芳さん、あぶない、早く来遁げ。!!

と三ちやんは芳さんに注意した、人間の仕事を怒り、而も亦之を恐れざるを知らない芳さんは、三ちやんへの暇乞もろこく、其處を飛去つた。

彼は道すがら三ちやんの不幸を憐み、且其述懐と、潔い斷念とを思ひ出し、其形体の醜いのを愧ぢた心を、自からあやしみ、此春のあらんかぎり、神の賜なる此歌に鳴き暮さうと決心した、

飛ゆく方の野邊は廣い、霞は低く棚引てをる、花満てるあたりには、乙女の唄も聞ゆる。蝴蝶も舞てをる、蜂も働いてをる、何れも皆天から授與された性のまゝに、行動してをるのだの、と彼は思つた。

やがて彼は小川の邊に、白き咲き亂れた李の枝に止まつた。今迄の心神の攪亂と、身体の激動とに疲かれはてた彼は、暖い春の日影に背をあふらせながら、いつしか夢に入た。

ふと目醒むると、日は早、西に傾かうとして居る。遠方には牛追ふ童の家路に急くのも見ゆる。彼が止つてをる李の枝からは、風なきにひらくと、花片のこぼれ散るもののよかな景色である。彼は聲勇ましく夕の歌を詠ひ出した。すると何處からとも知らず、舞うて來た一羽の蝴蝶、黄金色の羽に夕日を浴びて、彼が謠に合せて舞ひ出した、法法華經、法法華經、鶯は美しい舞姫を注て満足 堪へぬのであらう 聲も何時もよりは朗らかに、静かな夕の野邊を響き渡る、蝴蝶は巧みな樂師を得て、さぞかし嬉しいのであらう、翼のさばきも、誠に輕さうに見ゆる。

日は益々、西に傾いた。遠方は早や、棚引く霞に黒すみ初めた。樂師、舞姫、彼等はまた熱心に其樂を續けてをる

(三十六年三月二十日稿)

